

**11月2日(土)ゼミは開催します****2025年の年会費他について**

現在の会員数は72名です。さて、年会費5千円の振り込みをお願いします。尚、下記5名の会員の方は、既に年会費を入金済みですので振り込みは不要です。ところで、「古代史ニュース郵送」会員の方は、諸物価高騰の為、来年より別途2千円方ご負担をお願いします。尚、当会HPにも掲載中です。印刷も可能です。

1、振込銀行：三井住友銀行 飯田橋支店 普通口座  
6355550 古代史教養講座

2、入金済み会員（敬称略）

浅井壮一郎。小島達夫。坂元洋子。関根昌子。  
渡邊恭三。 以上。

**古代国家の成立 I : ヤマト王権から倭国へ**

—11月2日ゼミの紹介：齊藤 潔会員記—

日本の古代国家は、奈良県の東南部にヤマト王権が誕生して建国への歩みを始め、中国の漢・魏・晋から倭又は倭国と呼ばれ、唐時代に律令国家日本として成立する迄に400～500年間を要しました。その歩みを2回に分けてお話しします。今回のゼミでは、第1部：ヤマト王権から倭国へと題して、現在の皇統につながる継体・欽明朝あたり迄を述べます。次回ゼミでは、第2部：倭国から律令国家日本へと題して、推古朝から文武朝迄を述べます。

ここでは、今回のゼミ作成に当たって留意したポイントやゼミの補足を述べます。

1、日本の建国は、702年(文武天皇)に遣唐大使・粟田真人が「大宝律令」を携帯して、統一王朝の唐(武周)に赴き、皇帝・則天武后によって国号日本の承認を得た時である。そして、720年に律令政府は最初の国定歴史書『日本書紀』を漢文体で完成した。日本の建国は朝鮮の新羅(676～935年)や南満州の渤海(698～926年)とほぼ同時期である。即ち、漢帝国が崩

壊し、長い動乱の魏晋南北朝時代(220～598年)を経て、隋が再統一し唐帝国(618～907年)が引継ぎ安定化した時期にあたる。他の東アジア地域でも、吐蕃(チベット・629～843年)、ウイグル(744～840年)、チャンパー(ベトナム南部)、扶南(クメール)、ジャワ(ボロブドール寺院・8C 建立)等も建国し唐に朝貢している。

2、魏晋南北朝時代と日本や中国周辺諸国の建国  
中国は秦・漢帝国(BC221～AD220年)の成立で初めて統一された。特に、漢は約400年間中国を支配し、「史書」に東アジア地域の民族事情や出来事を記載した。しかし、漢がAD220年に崩壊し隋が統一する589年迄の間、中国は長い混乱期に入った。この期間を魏晋南北朝時代と呼ぶ。この中で、所謂非漢人の五胡(匈奴・鮮卑・氐・羯・羌)が晋を華南に追放し、華北に十六国を建国し激しい興亡を繰り返した。そして、最終的に華北は鮮卑族の拓跋氏が北魏を建国し、589年に同族の隋が全国を統一し、618年にはやはり同族の唐(～907年)が隋に代わり安定・繁栄期に入った。一方、中国の周辺民族にとっては、この混乱期が建国に向けて大事な揺籃期間となったのである。こうして冒頭で述べた日本を初め、朝鮮、南満州、チベット・東南アジア地域の国々が建国を達成してゆく。以下では、日本や朝鮮地域の国々の建国に大きな影響を与えたと思われる漢時代に設置された楽浪郡・帯方郡の中国官人遺民とそれを支えた人々(人口28万～40万人)とその役割について述べます。

① 約400年間(BC108～AD313年)続いた漢・魏・晋の朝鮮支配の拠点である楽浪・帯方郡が高句麗らによって崩壊し、多数の中国官人らが遺民となった。彼ら遺民は混乱の中国に戻った人々は少なく、大半は高句麗・百濟・新羅・加耶地域に流入し、その建国に携わったと思われる。一部は倭国に渡来した。彼らは特別な地位に就いて、行政・経済・外交・軍事・勸農・工業化等を教導し、建国を主導したと思われる。『記紀』記載の

渡来人も同様で、重用され大きな役割を果たした記事が多数存在する

② 朝鮮地域では、350年前後に百済・新羅の王の即位が伝えられ、先行している高句麗との領土獲得戦に入る。百済からの七支刀(金石文・370年頃)の倭王への贈与は、領土争いで倭を味方とする為だろう。370年前後には朝鮮三国の中国南北王朝への朝貢が相次ぐ。建国のお墨付きが目当てだろう。こうした外交戦は、中国遺民の知恵だろう。三国では新羅が最も遅く建国に向けて動き、長く高句麗に従属していたが、自立を目指して433年に百済と同盟した。500年代には加耶諸国を併合し、高句麗から10郡を奪取し、百済から漢城(現ソウル)を攻取して大きく領土を広げた。564年に北朝の北齊に、568年には南朝陳に朝貢を果たす。663～668年には唐と連合して百済・高句麗を滅ぼす。その後唐と対立し倭国や高句麗・百済遺民を味方に引き込んで唐と戦い、676年に唐との領土獲得戦に勝利して統一(北部国境は南浦・元山を結ぶ線)を果たす。見事な遠交近攻策だが、背後に中国遺民の知恵を感じる。

3、5C 後半の雄略天皇について

雄略は『万葉集』の巻頭歌に登場し、倭国を最初に統一した大王と見なされる。さて、478年の南宋皇帝宛の上表文で雄略は倭王武に比定される。『宋書』は、倭の五王(讚・珍・濟・興・武)の王統が、讚・珍が兄弟、濟・興が親子、興・武を兄弟と明記し、珍と濟間の血縁関係を記載していない。即ち、複数王統で一系ではない。更に、倭王珍と王族の倭隋らへの授与称号が、安東將軍一平西・征慮等で三品の同格でその差は僅かである。一方、『雄略紀』には「人制」の記載がある。これは王の家政機関で、6Cの支配制度である伴造制・部民制・国造制とは異なる。これでは統一王朝とは言えない。

4、邪馬台国(『魏志倭人伝』・以下『魏志』)について

①邪馬台国の女王の卑弥呼(シャーマン・鬼道)は、共立されて倭の女王になったのである。共立国(以下『女王国』)のクニ数は約30である。当時の倭には狗奴国を初めこれに属さないクニが多数あった。『魏志』はクニの総数を記載していない。一方、『漢書地理志』には、BC 1Cに百余国に分立とある。又、『隋書倭国伝』には、608年来倭した隋使裴世清が120のクニと報告している。この2書を参考に、邪馬台国時代の倭のクニの総数を同数の120とみなすと、女王国のクニ数は全体の1/4となる。即ち、女王国は倭を代表しているとは言えない。

③ 卑弥呼の外交:、238年に魏の出先の帯方郡治(現ソウルか沙里院)と洛陽に遣使した。朝貢品は生口10人と班布だったが、魏からの下賜品は、「親魏倭王」の金印紫綬、銅鏡百枚、真珠や多数の絹製品等豪華だった。240年には帯方郡長官の遣使があり、2年前と同じく豪華品の下賜があった。243年女王が遣使・朝貢。245年長官から黄幢下賜。247年には狗奴国と戦争になると激励文を受けたが、卑弥呼は戦死。この間の魏側の女王国への肩入れは尋常ではない。

④ 上記の卑弥呼の活躍した10年間の半島情勢を検証する。魏の支配下の朝鮮半島では、遼東の公孫氏が楽浪・帯方郡を横取りしていたが、238年に魏が公孫氏を滅ぼし帯方郡を取り戻した。一方、高句麗や南部の韓(馬韓・弁韓・辰韓)が強勢となり、魏は244～246年に交戦している。この事から、魏は帯方郡の防衛に女王国を高句麗・韓勢力の対抗勢力として利用しようと考えていた可能性がある。以上。

## ゼミ会場と時間 13:15～16:50

- 1、全水道会館(水道橋駅)・中会議室(5階)
- 2、JR又は都営三田線水道橋駅下車徒歩2分  
都営三田線水道橋駅はエレベータ使用可。

## 古を生きた磐之媛：第2部

—青柳 祥子会員記—

当時は一夫多妻の時代であり、父親が同じであっても母親を異にすれば婚姻は自由、という時代だった。天皇が宮に入れようとした八田皇女も共に応神天皇を父とする腹違いの兄妹だが、それぞれの母親の元で育てられているので、長じて初めて顔を合わせたのかもしれない。そもそも、天皇が八田皇女を宮に入れようとしたのは、事件が起こる八年も前のことだった。イワノヒメは天皇に話を聞かされて歌っている。

衣こそ二重も良き さ夜床を 並べむ

君は 畏きろかも

着物こそ二重重ねて着るのも良いけれど、夜床を二つ並べようとなさるあなたは怖ろしいお方です、といった歌意。天皇は、本命はあなたであって、八田皇女はあくまで副え物なのだから許してくれても良いではないか、と言っている。イワノヒメはきっぱりと拒否し沈黙をつらぬき、天皇もこの時は引き下がったようだ。こうしたことがあってから八年、イワノヒメが熊野に出かけているスキに八田皇女を宮の内に入れたというのが、事の顛末だった。

古来、仁徳天皇は聖帝の代名詞のような存在であった。幼少期から聡明且つ容姿端麗、加えて慈悲深い性格であったとされ、よく知られているものに国見の話がある。

天皇が高い山に登って国見をしたところ、見渡せど国中のかまどから一向に煙が立たない。天皇は「百姓は貧しく飯を炊くこともできないのか。それでは今より三年間租税と労役を免除する」とおっしゃって、自らの住いや衣服も手入れをすることがなかった。三年後再び国見をすると、民のかまどから煙が立ち上っている。これを見た天皇は安堵の気持を皇后にこうおっしゃった。

「百姓が貧しければ自分も貧しく、百姓が富んでいれば自分は貧しいことはない」

まことに天皇の鏡であると「古事記」「日本書紀」共に国見の話を記している。

天皇が皇子だった頃、父の応神天皇が「兄と弟と比べて可愛いのはどちらと思うか」と尋ねたことがあった。仁徳の兄は「兄のほうが可愛いに決まっています」と応えたが、仁徳は父がこの応えに不満であることをとっさに気づき、「私は幼い者のほうがいとしく思われます」と応えている。父が末の弟を次期天皇にする心積りであると気づいて、最良の返答をしたとして「記」「紀」共に記している。仁徳天皇は人の心を読む事に長けた察しの良い性格でもあったらしい。

もう一つの小さな挿話。

天皇は後宮に仕える女官を見初め、彼女の寝所に忍んで行きたいのだが、イワノヒメが目を光らせているので叶いそうもない。愛しく思う女性がこのままでは身を立てることができないと案じた天皇は「誰かこのヒメを妻に迎える者はいないか」と舎人たちに問うた。すると一人の舎人が妻にしたいと申し出たのだが、ヒメのほうが「好きでもない人の妻にはなりません」と拒絶し、程なくして病を得て死んでしまった。イワノヒメの嫉妬がヒメを死に追いやったともいえるのだが、ヒメは自分の意志を貫いた結果死んでしまったわけだ。

この挿話はこの後に展開するイワノヒメの家出話の前触れとしても相応しいが、同時に天皇の女官への思いやりを語る挿話ともなっている。民の暮らしを気遣い、女性には思いやりがあり、時宜を得た判断ができるとなれば、仁徳天皇は相当魅力的な男性に思えてくる。

仁徳天皇は土木工事にも秀でていたとされ、いくつもの事績が記されている。

五世紀の頃、宮の建つ高津一帯は大雨の度ごとに洪

水の危険に晒され、安全な居住地域ではなかった。天皇は現在の上町大地の北麓を掘削し、大雨であふれ出た水を大阪湾に流す堀江を造り、台地を安全な居住地に転じた。これが難波の堀江と呼ばれる堀江である。他にも、氾濫を防ぐ堤を築き、河川を引き入れて水田の耕作面積を増やし、道路を通して生活の便を向上させた等々、数々の事績も紹介されている。

こうした土木工事には渡来人の持つ先端技術が不可欠だったであろう。

イワノヒメの父葛城ソツヒコは、新羅から連れ帰った人質を葛城の邑に住まわせているので、半島の人々と直に接している。天皇が土木工事を進めるうえで、おそらくソツヒコは仲介役であり現場の中心人物であったと考えられる。

奈良盆地の南西に位置する葛城は葛城川が流れているとはいえ、直接水運に結びつくような地域ではなかった。海から遠い地の豪族がなぜ半島との外交を掌握できたのか定かではないが、天皇家も巨大な勢力を持つソツヒコとの付き合いを疎かにはできなかったであろう。葛城氏にとってもすでに半島との交流手段を持つてはいるが、難波に堀江を掘削すればさらに利便を得られる。天皇の事業を成功させれば、同時に自分の利益も得られるという協力関係に両者はあったのだろう。

葛城氏は仁徳天皇の父の時代から一族の娘を後宮に入れ、姻戚関係を結んで勢力の安定強化を計っていた。イワノヒメは正妃として迎えられ、四人の息子を産みそのうち三人が天皇位についている。しかし、五世紀末には葛城氏は滅亡してしまう。他氏族の台頭により相対的に勢力を弱めたことが直接的な原因だが、天皇家から次第にうるさがられ遠ざけられていたことも確かだ。天皇家と勢力拮抗していたのがまさに仁徳天皇とイワノヒメの時代であり、両勢力のパワーバランスの頂点に立っていたのがイワノヒメ皇后だったといえる。

天皇の裏切りを知ったイワノヒメは、実家の方角へと舟を進めたが、葛城への道は選ばず韓人ヌリノミの家に入ったまま、再び実家へ戻ることはなかった。

有力な実家があるのだから、実家に戻っても当然と思われるかもしれないが、イワノヒメは自分が立っている位置を知悉していた。天皇家と葛城氏が共に勢力拡張のために手を結び、その証として自分たちカップルが誕生したこと。父や氏族の事情を一身に引き受けて皇后になった以上、実家に戻れば問題は一族にまで及ぶであろうことも。

血族を裏切ったのだから二度と故郷へ足を踏み入れることはできない。かと言って裏切った夫の元へも戻らない。そこでイワノヒメが選んだのが、どちらでもない韓人ヌリノミの家であった。イワノヒメにとってはぎりぎりの選択であっただろう。

ヌリノミの家はカイコを飼い、糸を採り布を織っていた。ヌリノミは皇后に「三度変化する虫を献じた」と「古事記」は記しているから、家業の養蚕と織物の技術をイワノヒメに伝授したのかもしれない。

イワノヒメのふるさと葛城は「日本書紀」の神武東征記によれば、当時はまだ土蜘蛛と呼ばれる土着民が盤踞する、葛がはびこる未開の地だった。以来、ここを葛にちなんで葛城と呼んだと記されている。

葛の蔓は夏には草木に絡み付いて山野にはびこり、九月には紅紫色の花を咲かせる。葛は花も蔓も根もすべて有用で、花はお茶として、蔓は繊維を織物に、根はくず粉として食料となる。根は現在でも風邪の初期の薬「葛根湯」として家庭の常備薬にもなっている。花も蔓も根も役立つ葛の活用法は、古代でも現在でもさほどの差はないように思える。

イワノヒメは、葛の生える野原を駆回る活発な少女であっただろう。族長の娘として何不自由なく育ち、髪には紅紫色の葛の花の冠を飾り、思うが儘に遊ぶ姿が彷彿とする。娘時代には、葛の花の冠と同じ色をした大ぶりの柘榴石のペンダントが胸を飾ったことだろう。

柘榴石は、野原の北西に見える二上山から豊富に産出する、ガーネットと呼ばれる赤紫色の美しい石である。邑の娘たちの憧れのアクセサリーを胸に飾り、葛の花を髪に挿すのは、頬の豊かな体躯も豊かな女性が似合う。映画女優ならば山田五十鈴の姿が思い浮かんでくる。

その後、「古事記」ではイワノヒメは天皇の元に戻ったとされるが、「日本書紀」では生涯戻らなかつたとされる。戻らなかつたという方が物語を辿ってくると信憑性がある。イワノヒメはヌリノミの家で養蚕に携わり、下宿人になっても世話になるままに時を過ごすのではなく、何かしら仕事を見つけていたのではないか。

「万葉集」にはイワノヒメ作として歌が四首載っている。

君が行き 日長くなりぬ 山尋ね 迎へか行かむ 待ちにか待たむ

かくばかり 恋つつあらずは 高山の磐根しまきて 死なましものを

ありつつも 君をば待たむ うちなびく わが黒髪に 霜の置くまでに

秋の田の 穂の上にきらう朝霞 いつへの方に 我が恋やまむ

歌意は、あなたが旅に出てから久しくなります。山道を尋ねてお迎えに行こうか。それとも、ここでお待ちしましょうか。こんなに恋しい思いをするくらいなら、高山の岩を枕にして死んでしまった方がましです。

このままずっとあなたを待ちましょう。私の黒髪が白くなってしまふまで。秋の田の稲穂の上に立ちこめる霧のように、一体いつになったら私の恋が止むのでしょうか。

四首には天皇への恋心が、溢れる心情のままに歌われている。「万葉集」の恋歌が実際にイワノヒメの作かどうかは定かでないが「万葉集」の編纂された八世紀当時に、イワノヒメの歌として伝承されていたのは確かである。文字で記録されていたわけでもないのに、数百年もの年月を人々の記憶に生き続けていたらしい。イワノヒメが嫉妬深くヒステリックというだけの女性であつたら、この魅力的な四首の歌をイワノヒメの歌として伝承することはなかつたであろう。

彼女が嫉妬のあまり足を踏み鳴らしたとしても、夫の行動を変えることはできない。宮に戻れば天皇はまた自分を騙して八田皇女の元へ通うであろう。イワノヒメは何年ものそうした生活のなかで誇りが傷つけられていくことを思い、耐えられなくなったのではないか。イワノヒメの家出は嫉妬を通り越した自身の生き方の選択だったのではないかと思えてくる。

迎えに来た天皇を追い返してから、イワノヒメはヌリノミの家でのこれからの生活を考えたことだろう。三色に変わる奇しい虫は幼虫、繭、蛹へと変身し、糸をつむいでこの上なく美しい織物となる。イワノヒメも自身の美しい変身を思って、織物に励んだのかもしれない。

仁徳三十五年、イワノヒメはヌリノミの家で五年を過ごした後に亡くなった。イワノヒメの死の三年後、八田皇女が仁徳天皇の皇后となったが生涯子は無かつたという。

イワノヒメ陵は平城京跡の北方、佐紀盾列古墳群の一画にある、ヒシアゲ古墳とされている。

訪れたのは十年も前になるが、九月、古墳を囲む濠には黄色いコウホネの花が咲き競い古墳を飾っていた。明るいつゆの光の中で古墳はおだやかで、静かで、美しかった。了。

## 次回12月7日ゼミ・テーマ

「朝鮮半島の倭人勢力～狗邪韓国から任那日本府へ～」：飯田 真理。